

Usefulness of Prominently Projected Aortic Arch on Chest Radiograph to Predict Severe Tortuosity of the Right Subclavian or Brachiocephalic Artery in Patients Aged >44 Years Undergoing Coronary Angiography With a Right Radial Artery Approach

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: English 出版者: 公開日: 2014-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西崎, 祐史 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001601 |

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1538 号

Usefulness of Prominently Projected Aortic Arch on Chest Radiograph to Predict Severe Tortuosity of the Right Subclavian or Brachiocephalic Artery in Patients Aged >44 Years Undergoing Coronary Angiography With a Right Radial Artery Approach

(右橈骨動脈アプローチにて冠動脈造影検査を施行する 45 歳以上の患者における右鎖骨下動脈および腕頭動脈の高度蛇行予測のための胸部レントゲン上大動脈左第一弓突出所見の有用性)

西崎 祐史 (にしざき ゆうじ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、右橈骨動脈アプローチにより冠動脈造影検査を受けた高齢者を対象に右鎖骨下動脈および腕頭動脈の高度蛇行を予測する因子を検討した内容である。研究方法はカルテレビュールによる後ろ向き横断研究である。2003 年 7 月から 2011 年 8 月の間に右橈骨動脈アプローチにより冠動脈造影検査を受けた患者は 847 名であった。そのうち 48 名 (5.7%) が高度蛇行を合併していた。蛇行を有する患者の平均年齢は 73.4 ± 8.6 歳 (±標準偏差)、性差は女性が 29 名 (60.4%) であった。年齢および性別でマッチさせた患者をコントロール群として、高度蛇行に強く関連する臨床的因子を検討した。多変量解析の結果、高 BMI (Body Mass Index) (オッズ比 1.17, P 値=0.02)、胸部レントゲン上大動脈左第一弓突出所見 (オッズ比 5.62, $P < 0.01$)、血清クレアチニン低値 (オッズ比 0.05, $P < 0.01$) が高度蛇行と強く関連している因子であることが分かった。右橈骨動脈アプローチによる冠動脈造影検査が予定されている患者がこれらの臨床的要因を持つ場合には、右鎖骨下動脈または腕頭動脈に高度蛇行が存在する可能性があり、右橈骨動脈以外のアプローチの選択を検討すべきである。特に本研究は、胸部レントゲン上大動脈左第一弓突出所見が右鎖骨下動脈および腕頭動脈の高度蛇行を予測する有用な因子であることを初めて明らかにした臨床的に有意義な論文である。よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。